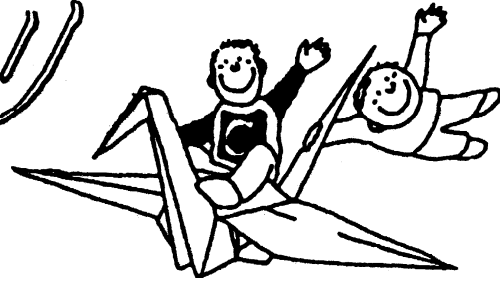


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



「救援関西」 発足26周年の集い

チェルノブイリとフクシマを結んで
子どもたちの健康と命を守ろう
フクシマを核時代の終わりの始まりに

* 基調報告：チェルノブイリとフクシマを結んで

～今年の活動を振り返り、来年に向けての提案～（事務局）

* 特別報告：チェルノブイリの経験をフクシマに活かす（事務局）

・汚染地の子どもたちの長期健康フォローを30年にわたって続けている
ロシア小児科医（小児放射線防護センター）の取り組み紹介

・「日本学術会議」（放射線防護・リスクマネジメント分科会）による
「子ども目線のALARA」（＝子どもの命と健康を「金勘定」）等への批判

* バレエ：「折り鶴」（ダンス コア ポシブル）

* 討論・アピール

* バザー：ベラルーシの民芸品、手作りケーキなど



日時：12月17日（日）1時半～4時半

場所：エルおおさか南館（734号室）

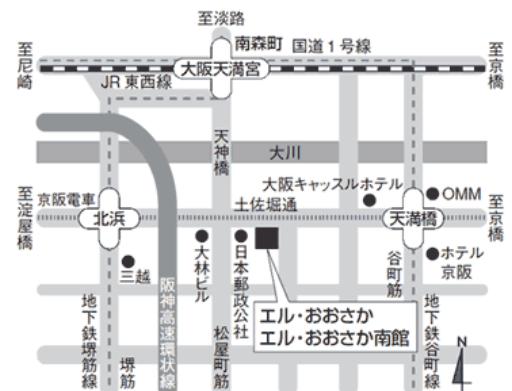
地下鉄谷町線・京阪「天満橋駅」より西へ300m

* 多くの方の参加をお待ちしています！！

問合せ：072 - 253 - 4644（いのまた）

0797 - 74 - 6091（たなか）

<chernob - kansai@7tan.ocn.ne.jp>



～自主上映とお話のつどい～

アニメーション：浪江消防団物語「無念」

お話：「絶対安全」はない！原発事故を体験して 岡洋子さん

(浪江まち物語伝え隊)

10月1日、「自主上映とお話のつどい」が弁天町 ORC 生涯学習センターで開かれました。アニメーションと岡さんのお話が相まって、事故当時とその後の苦しい避難生活、そしてアニメーションが出来上がるまでの様子がリアルに浮かび上がり、参加者の胸に強い印象を残しました。事故後6年半が経過し、だんだんと事故の記憶が風化させられる中で改めて Fukushima 事故が残した傷痕をうかがい知るものとなりました。参加者は延べ70名ほどでしたが、もっと多くの方に参加してもらえればと本当に残念でした。終了後、自分たちの地域でも上映会をしてみたいが、どうしたらいいだろうかとのお問合せも複数ありました。

岡さんは辛い避難生活の中で時間がストップしていたこと、川原の石を拾って来てその石に仏の絵を描きだして心が落ち着いたこと、そして近所の人と交流が始まったこと、以前経験のあった紙芝居に誘われ、広島の方との出会いもあり、仮設住宅を回って昔話の紙芝居を読むようになったそうです。そのうち、地震と津波に遭って助けを求めている人がまだいたのに、放射能汚染のために助けられなかった消防団員の「無念」の思いが紙芝居に、さらに「消防団だけでない。もっとみんないろんな思いをしているんだ。だったらそれをアニメーションに」と、みんなのいろんな思いがいっぱい詰まったアニメーションができたそうです。消防団員の名前以外は全部事実というこのアニメーションは「私たちの大事な宝物」であり、「伝える手段として、紙芝居とアニメーションを自分の居場所」という岡さんの思いがひしひしと伝わってきました。「絶対安全」な原発はない、もっともっと原発のある所に行ってこのアニメーションを伝えたい。そして自分で考えて欲しいという思いが伝わってきました。



以下に岡洋子さんのお話の一部を紹介します。(猪又雅子)

(尚、以下の「岡さんのお話」の文責は、テープ起こしとまとめを行った事務局にあります。)

「絶対安全」な原発はない！原発事故を体験して

岡洋子さん（浪江まち物語伝え隊）

福島県浪江町から関西には60余名の者が避難してお世話になっています。ありがとうございます。福島県には会津地方、中通り、浜通りとありますが、私の故郷・浪江は、浜通りにあります。浜通りは海と山と平野があり、本当に田舎ですが自然が一杯の所です。私の家は福島第一原発から直線で11kmの所にあります。居住制限区域でしたので今年の3月31日に避難指示が解除されました。

<それぞれ逃げて一避難生活が6年半に及ぶとは>

我が家は農家で、田んぼ、畑、そしていろんな野菜を作っていました。あの日、大地震、大津波、そして原発事故によって、浪江町民2万人は浪江町を出ることになりました。10km、20kmと少しずつ避難範囲が拡大していき、30数kmの所にある津島町にみんな逃げました。一番放射能の高かった所です。私は宮城県の名取市で地震に遭い、浪江には翌日帰ったので、みんなと一緒に行動はしませんでした。家が滅茶苦茶だったので片付けていました。娘は介護施設に勤めていて、休みなのに津波から100mのギリギリの所にあった介護施設に戻ったのです。それで私たち家族は娘が帰ってくるまで避難しないで家にいよう、何があってもいようと決めました。でもいよいよ危ないんじゃないかと、周り近所に誰もいなくなったのでとても不安でした。もう一人の娘がいて、その娘のことも案じたので、70km～80km先の中通りまで逃げました。その後、原発が爆発したのです。でも浪江町は原発立地地域ではありません。隣町です。町長の指示でずっとずっと逃げたんですが、てんでバラバラになりました。津波は高さ15mだったんです。みんなはどこに行ってもいいか分からなくて、南に行っても北に行っても西に行っても、とにかくみんなバラバラになってしまいました。でも生きるために私たちは衣食住を探さなければいけません。逃げて、それぞれ逃げて、どこに誰が行ったかは分かりません。でもまずは食べることです。まずは住む所です。こんなに逃げっぱなしで、まさか避難生活が6年半になろうとは思ってもみませんでした。すぐに帰れると思っていたので、犬を繋いでできてしまいました。餌を一杯おいて、バケツに水を一杯入れて。帰っていいと言われた時には犬は亡くなっていました。いやあ、申し訳ないことをしたな。なんて悪いことをしたんだろうと。でも野良犬はいっぱいいました。ああ、放して来ればうちの犬も生きていただろうになあって。



<時間がストップした避難生活>

我が家は地震で壁は落ちましたが、昔からの農家でしたので土台はしっかりしていました。でも、さあ、戻っていいと言われて戻ってみてびっくりしました。私はみんなより遅く避難したので綺麗に片づけていった筈なのにすごい状態でした。それは動物か泥棒か何かは分かりません。行くたびに散らかっているんです。もちろん農家ですので、鍵はかかっていません。そうすると家に入るのが気味が悪くなって。誰の家かなって。ドンドン叩いて、それから入るようになりました。そして、まるっきり入れなくなって、娘のアルバムとか最低限の生活品をもって逃げました。なんか自分の家に行くのにおっかなくて、冷や汗かいて、何だろうこれ、どうしたらいいんだろうと思いました。そこでもう時間がストップした気がします。仮住まいが決まった時、何にもないがら一とした所に布団4組だけがあって…でもそこから少しずつ頑張ろうよと。

<塩おにぎりが美味しくて一そこからスタート>

近所の知らない人に塩おにぎりを貰った時、なんて美味いんだろうなって。家は農家だっ

たので米も野菜もなんぼでもあったのに、もう食べられません。そして家族の為にしばらくぶりに包丁を握った時、何か妙に嬉しくて。なんにも具のない味噌汁を作った時も嬉しくて。塩おにぎりだけでも美味しくて。茶碗もないのに。そこからスタートしました。

あっという間に月日が経ったんですけども、その避難生活で私は「何やってんだ。何やってたんだ。」と言われた時、ただ居たというだけでは悔しくて、周りに何かできることを探そうよ。でも6月までは何もできなくて。その後少しずつ、川原から石を拾って来て、絵の具でお地蔵さんの絵を描きました。なんだか心が落ち着いて、花とかも描きました。そして玄関にその花とか動物を描いた石を置いたら散歩の人たちが「なあんだ、これいいなあ。」って言うから「どうぞ、どうぞ」とみんなにあげて、そこから交流が始まりました。でも子どもたちも主人も次の道を考えなくてはならない。主人は単身赴任することになりました。長女は介護施設に戻りました。下の娘も介護の勉強をするのに学校が決まっていたので、そちらにいきました。私も負けていられないなと思って。

<紙芝居との出会い>

浪江町は中通りにお世話になり、仮の役場を作りました。そこで会議に行った時「紙芝居やらないか」と誘われ、できるかなと思いました。が、婦人消防隊にいた時、子どもたちに紙芝居を読んでいたので、「じゃあ、ちょっとやってみるかな。」と。その頃、広島県から仮設住宅にボランティアで来てくれた人たちがいました。自分たちは原爆でいろんな目に遭って、福島で同じことさせてはいけない、そんな思いから来たと思います。そんな人たちと出会ったお



かげで紙芝居「浪江町の昔話」を読むようになりました。それは仮設に避難していた高齢者の方から「俺も原稿持ってっから」と言われて広島の人に作ってもらったのが始まりです。その方は次の年に亡くなってしまったのです、そんな作品がいっぱい残りました。そして昔話を持って仮設住宅を回りました。「いやあ、懐かしいな。その土地知っている。俺の近くの話だ。」という人が一杯いたんです。「あー、嬉しいなー。みんなと会話ができるだけでもいいな。」と。そしてその後、いろんな所に行っているいろんな思いを聞きました。「悔しいな」とか「どうしたらいいんだべな」とか。うちの紙芝居の会長が消防団の訓練分団長に出会いました。「消防団の仲間が見つからないんだ。そして助けに行った時、目の前に『助けて助けて。』と言う人が一杯いるのに。『待ってろ。今灯り持ってくるからな。待ってろ。』と言ったきり戻れなかった。申し訳ねえ。その思い、どうしても悔しい。」と言った時、うちの会長が「紙芝居にすっぺ」。その消防団の人は看板屋さんだったので、筆で全部書いておきました。「あー、これを形にするなあ」と言って。私は婦人消防隊もやっていて、みんなの顔も分かりますので、読まさせていただきました。場面、場面を見ると、こみ上げるものがありました。でも「私が泣いちゃだめだわ。これはちゃんと伝えなければいけない。ちゃんと事実を伝えなければいけない。」でも仮設に行くと「こんなの聞きたくない。うちの父ちゃん、津波で亡くなった。」と言われたら「ごめんな、ごめんな。でも伝えていかなきゃなんないんだ。」と言って読ませていただきました。いろんな話を聞くと、消防団だけじゃない、もっとみんないろんな思いをしているんだ。だったらそれをアニメーションにしよう。去年の3月、

この「無念」というアニメーションができました。私も声優として出させてもらったんですが、何と言ってもみんな素人です。上手にできるはずはありません。私は大地康雄さんのセリフをカセットに入れて送りました。浪江弁です。浪江弁をしっかりと暗記してくれました。聞いたんです、大地さんに「どういう風に喋ったらいい？」そしたら大地さんは「俺は役者だ。声優ではない。みんなの思いを伝えればいい。」。みんなは変わりました。大事な作品です。一つ一つ精いっぱいやりました。たき火のシーンは、最初から最後までみんな涙こぼして、外にいる人もみんな涙こぼしてました。

<紙芝居とアニメーションを自分の居場所として>

私たちの大事な作品、この作品は広島と福島で発信しました。すごい勢いでみんなが観てくれました。「あー、私たちの元から旅だったんだな。でも浪江を語れるのは地元の人だな。」このアニメーションと共に声をかけていただける所に私は行くことに決めました。何も難しいことは分かりません。こうやって訛っています。でも浪江のことは喋れます。豊かな町だった。緑が綺麗だった。美味しいシャケが登ってきた。いろんなことを語れます。いろんな人を思い浮かべられます。そんな私が伝える手段として、この紙芝居とアニメーションを自分の居場所としてやっていこうと決めました。何も無理することない。本当のことを言えればいいんだ。

<一番大事な命>

私の家は昨年 5 年ぶりに除染しました。ハクビシンは入る、ネズミは入る、ジャングルのようだったのですが、そのジャングルが掃除をすると住めるんじゃないかと勘違いするほど綺麗になったのです。でも中身の物はどんどんひどくなっています。住まない家はどんどん傷んでいきます。主人と「片づけっぺ」と帰ってみても胸が一杯で片づけられないんです。それを繰り返した挙句、東京電力の人に片づけを頼みました。20 人の人が二日間にわたって片づけてくれました。「何にも要らねえ。位牌と遺影だけ残してくれれば何にも要らねえ。」と主人が言いました。「あれも大事これも大事…でも一番大事な命なんですね。」そうだ、私たちはこれをちゃんと処分しなければ前に進めないんだって思ったんです。除染して娘を初めて連れて行きました。「なんだか冷たい家だね。本当にここで生活してたのかなあ。なんだか悲しいな。でもお母さん、見つけた」「何を見つけたの」「生きてきた証」「何？」柱の傷でした。子どもにとっては、成長をずーと印をつけていた柱の傷。もう私より随分大きいのに、こんなに小さい傷をとっても喜んで見ていました。自分の部屋を見て、改築したばかりで、これからという部屋だったんですけども。何もない部屋を見て、「寂しいな」と言ったのを覚えています。そんな家もこの前行った時、イノシシにドアを壊されて倒されて、グジャグジャになっていました。「あー、もうダメかな。」ここを帰ってくる場所にしたいなあと思っていたんですけども。主人が「壊す」って申し込んで 1468 番の番号を貰いました。先週、まず蔵だけ壊しました。なんだか重機が来たら、壊すと分かっているけど寂しいもんだなと思いました。「何か悪いことしたかなあー？」ここで子育てして、部落の人といろんなことを学んだ場所だったのに「私たちなんかしたかなあ」ってうんと思いました。更地になってしまっただけぽつんと残って。子どもたちに言ったら「やっぱり壊さないで！」って。でも、あなたたちに、この「負の遺産」を残しておくわけにはいかないんだ。まだ話し合い中です。でも壊してもらうのに期限があります。それを過ぎると壊すのに 700 万かかると言われました。それまできちんと話をして納得いくようにしなくちゃいけないと思います。

<アニメーションがきっかけで一立ち止まってもいいんだ>

私たちだけじゃなくて、この震災によっていろんな失うものがあります。地域でとても活発にしていたコミュニケーション。この前のお盆に 6 年ぶりに初めて集まれる人だけが集まって、リメイクした家に 50 人が集まりました。「いやあ、やっぱりいいなあ。浪江はいいなあ。」でもお酒飲めないんです。県外から来ている人もいるし、遠くから 2 時間、3 時間かけてきた人もいる。でも「浪江焼きそば」作って、ノンアルコールを飲んで、そしてたわいの

ない話をして「来年もやっぺなあ」って。多分それは一歩前進したのかなって。私はいつも頑張ってる。頑張ってる。「少しでも前に行くべ」と思っていたけど、この「無念」のアニメーションで「立ち止まってもいいんだよ。泣いてもいいんだよ。」というシーンがあった時「あーそうか、いいんだ。ちょっとゆっくり、ゆっくり進めばいいんだ。」すごく楽になったんですね。だから私もこのアニメーションがきっかけで皆さんとも会える。自分も変わる。いろんなことを、第 2、第 3 の人生として私はとらえようと思いました。



<どこにも帰れない>

(資料にある浪江の写真の) 大平山の麓に一本道があります。その一本道に車で逃げようとみんな並びました。動くはずはありません。でもみんな律儀に乗っているんです。それを見た警察官が窓を一つずつ叩いて「ほら、逃げろ、逃げろ。あの大平山に逃げろ」と言って歩きました。警察官は大平山の下で見つかったんです。お花があって、これ何って聞いたら、その警察官はここで見つかったそうです。大平山に逃げた人は、ほんとにかろうじて助かりました。そこで一晩、過ごしていた人もいたそうです。人が流れる、車が流れる。今は大平山から海を眺めると、なんでこんな狂った津波が来たのだろうと思うくらい穏やかです。そこに慰霊碑を建てました。亡くなった方の為に。そしてお墓も建てました。浪江町は震災の関連死が 400 人もいます。津波や地震で亡くなった人もいますがそれ以上に関連死が増えてしまったのです。仮設住宅に行っても「おら、行くところねえ。」。復興住宅が決まっても「おら、行きたくねえ。保証人もいねえしな。若い人が東京に行くから東京に行こうと言ったって、東京にはいがんねえな (行けないな)。亡くなるまでここにいっぺ。」そういう人が多いんです。自宅に帰りたい。でも今 6 年過ぎても帰れないんです。

<代わりに津波に・・・>

「無念」に出てきた、まだ見つかっていない消防団員の話をして。アニメーションでは「鉄平」という名前ですが、事実と違うのはここだけです。A 君と言います。一人息子で、東京で結婚して子供が二人できました。お母さんと話をしたんです。お母さんは辛かったと思います。まだ見つかっていないんです。でも息子に会いたいということで青森県の恐山に行って「いたこさん」に話をしました。息子さんはあの日、消防団で声をかけて歩いたそうです。自分たちも戻ろうと、1 台の車に乗って。自分の車はお母さんとお嫁さんに貸してないので、先輩と行きました。途中、大学生が川で溺れていたのを助けて「じゃあ先輩の車に乗

って。自分は後から来る車に乗るから。」と。先輩は当然、後ろから車が来ると思って逃げました。後から来ると思った A 君は津波に流されました。そしてその先輩も家族もなんで消防団から帰ってこないなって、何日も何日も思ったそうです。でもそのいたこさんの話では、A 君は、下半身が埋まっていたそうです。でも上半身は海の中でいっぱいもがいて、もがいてもがいて…力尽きたそうです。浪江町は捜査に入れなかったのも、ひと月後くらいに重機が入りました。そしてどんどん奥に入ってしまった、もう見えないところにいるそうです。「おふくろ、俺は成仏している。皆に思ってもらって、葬式挙げてもらったものな。周りには成仏できない人が一杯いるんだ。」そんなことを言っていたそうです。だからお母さんは毎年会いに行くそうです。お母さんは旦那さんも亡くなっている。旦那さんは震災前に亡くなっているんですが、旦那さんに、恐山で「いたこさん」にみてもらったら「息子をみてるからな。助けられなく悪かったな。」そんな答えが返ってきたそうです。今そのお母さんはお孫さんとお嫁さんと一緒に頑張っています。忘れないで欲しいと言われたから、忘れないようにしているそうです。

<フランスでも上演—交流を大切にしたい>

大阪からフランスに行って 40 年になる人から、フランスで、世界で 2 番目に原発のある所に来て喋ってほしい。そんな問合せが来ました。私は飛行機なんかおっかなくて乗れないし、ましてやフランス語なんか喋れない。そしたら「ボンジュール」だけでいいと言われました。フランスに行ったら、フランスにいる日本人の方がサポートしてくれて、あらゆる所でアニメーションと紙芝居を上演させていただきました。勿論アニメーションは日本語なんですけども字幕を入れました。集会ではどこでも 100 人以上がきてくれました。そこで意見交換をして、それが終わったかと思うと私たちひとり一人にハグをしてくれました。「心は一つだよ。日本のことは忘れたことはないよ。」と言ってくださいました。こんな遠い国なのに心は繋がっていると思います。それは東日本大震災が起きた時、フランスの日本大使館の前に、お花が山のように積まれたそうです。誰も何も言わないのに日本を思っていますという気持ちを、みんな寄せてくれたそうです。私はこのご縁を大切にしたいなあと思います。

<若い世代に伝える>

そしてこの「無念」にもう一人ラジオ福島の大和田さんという方がいます。横浜出身ですが、ずっと長くラジオ福島をやっている方です。その方は、実は震災の時、福島で生放送をしていて…その方は退職してからも私たちの町に何回も来て、寄り添ってくれています。そしてアメリカ・フランス・ヨーロッパ・ハワイとか、いろんなところに行行って上演してくれます。私たちよりも知識が多いくらいです。いろんな人に、いろんな言葉をかけて頂いて。だからこのアニメーションを作ったおかげで、私たちもこうやって伝える手段をいただきました。こんな素人の私が、農家の嫁です。嫁の修行を 30 年積んで、そして避難しているんですけども。私はこのアニメーションから、本当にいろいろ勉強をさせてもらって、これから生きる知恵をいただきました。だからこれらの若い世代の方に、この大変なことを継いでもらうのは申し訳ないけど、私たちができることをちゃんと正直に伝えて、この日本がよくなるように、日本だけじゃない、地球がみんなよくなるようにそうしてほしいと思っています。

<私が伝えたいこと—原発は安全ではなかった>

私が震災を経験して伝えたいことは、絶対安全だと言われていた原子力発電所がそうでは

なかったんです。もっともっと原発のある所に行ってこのアニメーションを見せたいな。そしてそれぞれが考えて欲しいなと思います。今まで過ごしていた当たり前の暮らしがいかにか大事か、ご飯があって水が出て、家族が「いってきます」「お帰り」というこの環境を普通だと思っていた。普通じゃないんです。本当にありがたい事なんです。家族がいるってすごいなあとと思います。今日ご縁があってこのアニメーションを見て下さった方はおうちに帰って是非話をしてほしいと思います。福島の人みんな感謝しているからって。みんなにお世話になってみんなに応援していただいて。何にもできないけど、今日本で大きな災害が起きればその人たちに恩送りとしてできることをしたいと思っています。皆さんに返すことはできません。でも元気であることが一番だと思います。自分の命は自分で守ってほしい。大切なことです。明日何が起きるか分かりません。でもこうやって授かった命。私の家族はみんな元気です。本当に今、いい勉強をさせてもらっています。振り返った時、なかなか私の人生良かったじゃん。この震災も、千年に一度の震災も、長かったな…生まれ変わって、皆がどうなっていくか、見てみるのもいいなって。後悔しない生き方をしたいと思います。以上です。本当にありがとうございました。

「無念」の思いを受け止めて

阪口博子

私の住む長崎では、同じヒバク地の市民として、福島の被災者の方と交流し、支えあうことができたとの思いから始まった「福島と長崎を結ぶ会」があります。2013年からその活動は続いています。福島県で高校生平和大使を務められた方たちの被災の状況とその後の体験や、避難した後長崎で就職された方の心境などを聞く会を開催しました。夏休み期間に高校生たちが長崎で休養してもらうサポートや、被災地を訪問して写真展を開催し現状を報告する活動も行いました。6年目の今年も4月に飯館や浪江、双葉町を中心に訪問し、10月にはその写真展を開催しました。その時は現地の方のお話を聞く機会ができなかったのが、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西からのお知らせを見て、私はぜひ岡さんの思いを伺いたいと思って大阪にきました。

始めに、浪江町の消防団の方々が、目の前に助けを求める人がいるのに、放射能汚染のために助けることができなかった命への「無念」をアニメにしたものが上映されました。その無念の思いが場面の一つ一つに、それぞれが語る言葉に込められていました。声優も大地康雄さん以外は全て浪江町の方々が演じられ、事故当時とその後の苦悩の叫びがリアルに聞こえてくるようでした。

私も「福島と長崎を結ぶ会」の一員として4月に浪江町、双葉町の海岸線沿いの陸前浜街道を車で走りました。その時の原発付近の海岸で見た風景。落下したままの橋げたや、壁が崩れた工場跡。1階部分は津波にさらわれ、2階部分は形をそのまま残した新築らしき廃屋。それぞれから無念の叫びが聞こえてきた、その情景がアニメの場面と重なって見えました。

岡洋子さんの話は、浪江の事故前人口22000人の中で、避難指示が解除されて戻った人が2%弱300人、関連死が400人もいるという現在の浪江町の状況を報告されました。現在は福島市内で避難生活を送っていること、そして、避難先から自宅の様子を見に訪れた際に家の

中を整理して帰っても、人なのか、獣なのか、その次帰ったら必ず家が荒らされている、何も残っていない状況だった。でも唯一残っていたのが、子供たちの身長を図った際の「柱の傷」。これは唯一自分たちが生きてきた証だ、との言葉に無念の思いが詰まっていて、その犠牲の重さを突き付けられました。本当に何もかもが事故によって奪われ、二度と元の生活には戻れない状況を訴えられました。また、岡さんは優しい語り口の紙芝居で多くの方々が体験した震災と被曝の状況やその後の苦難を伝えられました。忘れ去られつつあるフクシマを覚えていてほしい、一人でも多くの方にフクシマを伝えたいとの気持ちが伝わってきました。6年が経過してフクシマの被害は多岐にわたり、複雑になっていると感じています。それぞれの苦悩は計り知れないものがあると思います。司会の振津さんから、フクシマの事故はまだ続いているとの思いは共有できたのでは、との言葉を胸に刻みました。

絶対安全を信じて、受け入れた原発。しかし地震による原発事故が起こり取り返すことができない事態となってしまった。私たちは再び過ちは繰り返してはならない。原発再稼働をさせてはならない、フクシマを伝え続けなければならない、その思いをさらに強くした集いでした。長崎の地でも伝え続けたいと思います。

<アンケートから一部抜粋>

- ・アニメも岡さんのお話も私が観て聞いただけでは本当にもったいないことでした。紙芝居文化を改めて力強いものだと思います。でも今の浪江のことを私の地域で伝えるむずかしさも感じました。何としても忘れないで広めていきたい。その力が欲しい。
- ・ こういうチャンスで、実際に津波・地震にあわれた方のリアルな話を聞けて本当に良かったです。なかなか生の声を聞けなかったのです。やはり忘れてはいけないと思います。
- ・ フクシマは終わっていない。けれど人は生きていかなければいけない。勇気を持って前向きに生きていращやる姿に、私も勇気をいただきました。
- ・ たくさんの方が最後に登場されたのがこの話の重みを感じさせました。たくさん報道されている哀しみの一つをまた発見しました。一部であってもその重みは耐えられない程重いものだったと思いました。(知事抹殺を見ました)
- ・ 原発事故の不条理をよく理解できました。神戸でも浪江の避難者の方に話を聞きました。浪江の皆さま、特に馬場町長の信頼は絶大でした。今の政府の復興とは違って「ゆっくり」ふるさとを取り戻してください。
- ・ アニメ「無念」作った心意気が伝わってきました。3. 1 1 とその後どれだけのことが起きたか、改めて思い起こしました。
福島のことには忘れません。忘れることはできません。できることをして支えたい。紙芝居が素晴らしい。
- ・ アニメの無念も心打つものだったのですが、岡洋子さんが語られる、ふるさとの思い出が一言一言心に響く言葉に感動しました。
- ・ アニメの「無念」も心打つ物語だったのですが、岡洋子さんの語られる、ふるさとの思いが一言一言心に響く言葉に感動しました。
- ・ 生の声を聞くことができて良かったです。「ゆっくりでも」という言葉が特に印象的でした。「信じて信じて拳の果てがこれ。泣けるようになったとは前に進めるようになったんだ。畑の物

は食べさせないで」も。

- ・お話が途中からになってしまいましたが、岡さんのお人柄・想いが感じられました。
映画は震災と原発事故を語りつぐための貴重な資料だと思います。福島の人たちの複雑な、深いところでの気持ちを、断片的にですが、よく表現していて、この映画に加えて、現地の方が思いを語って下されば、遠くにいる者にも、二度とこうしたことを繰り返してはならないということが、伝わると思います。
- ・「あたりまえの生活の大切さ、ありがたさ」「恩送り」「俺たち、いったい何をしたんだ？なぜこんな、悪いことしたのか」「忘れない」いろいろ重みのある、心にせまるお言葉でした。噛みしめて一緒にがんばっていかれたらと思います。本当にありがとうございました。
- ・今日のアニメはどうしても観たかったので、来れて良かったです。私たちの周りには、どうしても他人事として考えるむきが多いようです。やはり自分の問題として考えていく必要があると思います。今後も活動、頑張ってください。原発は必要か！
- ・私の家でも犬をつないだまま逃げました。青森でいたこに亡き息子の思いを聞きに行ったところは親子の深い想いを感じ、心が動かされました。その話をききとられ、伝えられたことが、素晴らしいと思います。ありがとう！
- ・とても胸に響きました。多くの人に観て欲しいし、自分たちも上映会ができないかと・・・とても強く思いました。
岡さんのお話も、たくさんの人に聞いて欲しいです。
- ・人が見えてくるような話をアニメがしていた。岡さんが、プラス思考に考えられていることを感じ、自分もみならわなければと思いました。
- ・原発さえなければ・・・という怒りと腹ただしさと悔しさとで、私でさえ、胸が熱くなり、涙がこみ上げてきました。ましてや当事者の方々の思いは「いかほどだったことでしょう！」今日この場で、この作品に出会えてことに感謝します。二度とフクシマを朽ち返してはいけない！原発再稼働なんて絶対に許せない！と言うおもいを強くしました。この作品をより多くの人たちに見てもらい、お話を聞いてもらいたい！と思いました。
- ・「無念」を観ていて、6年前のフクシマを思い出しました。事故直後、福島に入り、駅周辺の放射線量の多さにおどろき、そして、飯舘村での誰もってはならない鈴生りでおいしそうな赤い柿の実ができている姿を見て呆然とした思いを思い出しました。
原発を推進してきた人々は、この出来事を封印し、まともや原発を再稼働しようとしている。許せない。

チェルノブイリ事故31年目の現地訪問・報告-その3

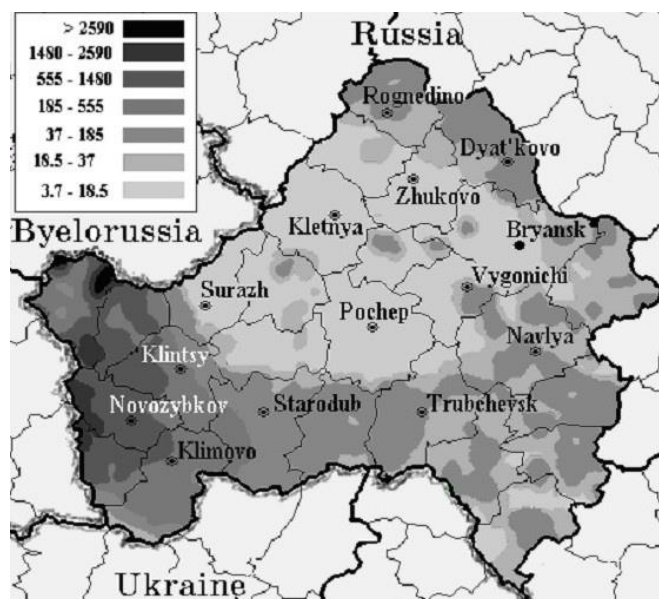
報告：振津かつみ

前号のジュラーヴリ 110 号に引き続き、今年4月の「現地訪問報告-連載その3」です。今回は、4月24～26日に訪問した、ロシアのチェルノブイリ被災地、ブリャンスク州ノボジブコフの様子についてご報告します。

ノボジブコフはチェルノブイリ原発から約180km 離れていますが、地区のほとんどがセシウム 137 の汚染レベルで 555-1480kBq/m² となっていました。（福島事故後の飯舘村と同じくらいの汚染レベル。右図はブリャンスク州の汚染地図。ノボジブコフは西端のベラルーシとの国境沿いの地区。）1991年に「チェルノブイリ法」が制定され、ノボジブコフの街全体が「移住ゾーン」に指定されましたが、街の人口が6万もあり、主に経済的理由から、ほとんどの住民は移住ができずに住み続けざるをえませんでした。周辺の農村部は、「義務的移住ゾーン」（1480kBq/m² 以上、年間5mSvを超える地域）となり、住民のほとんどが移住して廃村になったところもあります。

私たちは、このノボジブコフの NGO「ラディミチ〜チェルノブイリの子供たちのために」と10年以上にわたる交流があり、ベラルーシのチェルノブイリ被災地クラスノポリエなどの子供たちが、「ラディミチ」が運営するロシアの非汚染地での夏キャンプ「ノボ・キャンプ」に参加する費用を支援してきました。昨年のお阪での「チェルノブイリ31年・フクシマ5年-国際シンポジウム」には、「ラディミチ」の元代表のパーベル・ブドビチェンコさんに来て頂きましたし、夏の広島・長崎の原水禁大会には「チェルノブイリ情報センター」担当のカーチャさんが招聘され、大阪でも講演会を持ちました。

ベラルーシとの国境沿いの地区なので、クラスノポリエから陸路を車で移動すれば、2時間足らずで行ける距離です。でも、ロシアが外国人の陸路での入国を今年に入ってから厳しく制限するようになった（隣国ベラルーシが「ビザなし短期入国」を認めるようになったので、ロシアはベラルーシ経由陸路で「テロリスト」が入国することを警戒しているとか？）ので、今回は、クラスノポリエからミンスクに車で戻り、飛行機で再びロシアのモスクワに戻って、そこから夜行列車でまた国境近くのノボジブコフに向かうということになりました。



チェルノブイリ情報センターのカーチャさんの「放射線教室」

4月26日の「チェルノブイリ記念日」の直前だったこともあり、「ラディミチ」の二階のホールで、カーチャさんが地域の子供たちに、チェルノブイリ事故と放射能や被ばくに関する「教室」「コンサート」などをやるということで、24日と26日に、見学させてもらいました。街の学校の先生たちの中で、「ラディミチ」の活動にも理解のある先生たちが、自分のクラスの子供たちを連れてきて「ラディミチ」での企画に参加するという形です。

＜歌や詩朗読、クイズやゲームを取り入れて子供たちの関心を引き出す＞

24日は、英語の先生が自分のクラスの子供たち（日本の高校生くらいの年頃）20人ほどを引率してこられました。始めにチェルノブイリ事故そのものについてのビデオ（テレビ番組の録画？）を上映。その後、隣街のクリンツィ（ノボジプコフよりは少し汚染レベルの低い「移住の権利のある居住地域」の街）の高校生のボランティア「環境クラブ」のメンバーによる、チェルノブイリをテーマにした詩の朗読と歌が披露されました。内容は「放射能汚染の悲劇から、逃れられない。リクビダートルの英雄的犠牲によって、事故による放射能汚染拡大をなんとか押しとどめ、今、私たちの命と生活がある…」というようなもの。そして後半は、カーチャさんによる「クイズ」で、子供たちに放射性核種や、被ばく健康影響などについてのク



イズを出し、答えられた人にささやかな「景品」を渡す。その次は、身体を動かす「ゲーム」で、原発事故の消火にあたった消防士を真似た服装をできるだけ早く身につけるのを競うというもの。希望者が二人ずつ前に出て、作業服とヘルメットを早く装着できた方が「勝ち」というのをやって…。子供たちが、ワーワー、キャーキャー言って「楽しみ」ながら、チェルノブイリ事故や放射能のことについて興味を持つ、きっかけをつくりたいというカーチャさんの工夫が感じられました。約1時間のプログラムは、あっという間に過

ぎました。最後にカーチャさんが「チェルノブイリ情報センター」作成のリーフレット（地域の汚染状況、森のキノコや木の実には放射能汚染がある可能性があるのので気をつけましょう…など書いてある）を配布して、「もっと知りたい人は、いつでもこのセンターに来て下ね」と、「宣伝」をしました。

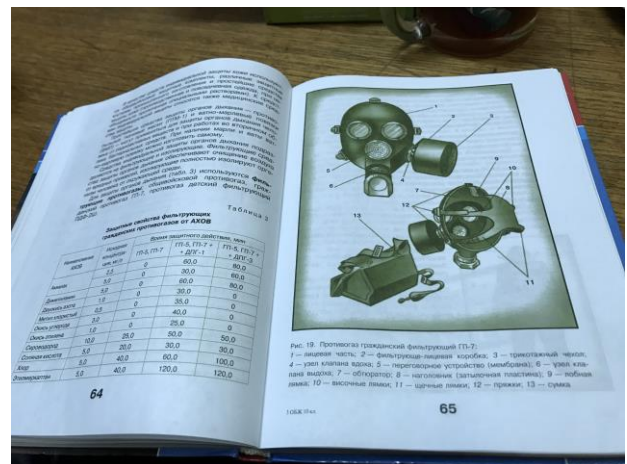
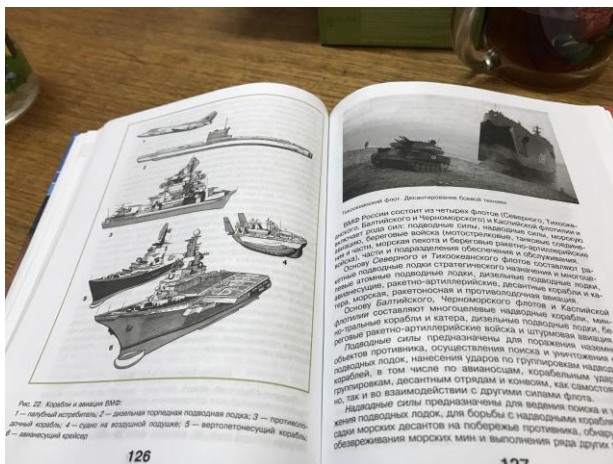


<地域の高齢者から事故当時の体験や汚染状況の話を聞く>



っていることに気づき、ノボジプコフで一番初めにチェルノブイリ事故による高汚染を察知した人です。

25日は、「生活の安全」という課目を担当しているシゾフ先生が、教員養成専門学校生徒たち10数人を連れて「ラディミチ」にやってきました。ちなみに、シゾフ先生の担当課目「生活の安全」では、雷や嵐などの自然災害から身を守るための知識とただでなく、核戦争も含む「有事」の際の対応についても教えるそうです。彼は、1986年のチェルノブイリ事故直後の4月末に、たまたま授業で使うガイガー・カウンターのチェックをしていたところ、針が振り切れるほどの高い空間放射線量にな



シゾフ先生が使っている教科書。軍艦などの説明(左)。ガスマスクの説明(右)。

後日、シゾフ先生が学校で使っている教科書を見せてもらう機会がありましたが、核兵器や化学兵器についての図入りの説明や、古代からの戦術・戦略の歴史なども載っているので、ちょっとビックリしました。やはりソ連時代からの核兵器保有国であるロシアでは、国民の「常識」としてこのような知識を学校教育でも教えるのかな…とも思いました。また、チェルノブイリ事故当時、ソ連軍が「核戦争の有事」に備える部隊や装備を持っていたこともあって、事故直後の早期に担当部隊が出動し、汚染地住民の甲状腺被ばくの測定なども数多く行いました。その手書きの測定データが残っていて、その後の健康影響の調査にも役立っているというのも、皮肉なことです。事実です。原発重大事故時の住民の甲状腺被ばく検査など、適切な対応が全く取れなかった日本とは大きな違いです。(話しが少し「放射線教室」から逸れましたが…)



この日の「放射線教室」は、上記のようなシゾフ先生自身の事故直後の体験談とあわせて、事故当時、地域の土壌や農作物などの放射能を測定していた研究者で、今はもう退職している方が招かれ、事故後の地域の土壌汚染、地域の作物や森のキノコなどの放射能汚染がどのような状況だったかなどについて、自分自身が測定した値をしめしながら学生たちに話してくれました。

＜環境問題？に取り組む高校生＞

24日にチェルノブイリをテーマにした歌と詩朗読を披露してくれたクリンツィの「環境クラブ」の高校生たちが、「環境問題に取り組んでいる」とのことでしたので、どんな活動をしているのだろう…と、カーチャさんの「教室」が終わった後で、メンバーの高校生たちに少し話を聞いてみました。



10年前にチェルノブイリ事故のリクビダートルから学ぼうということで、結成したサークルだそうです。顧問の先生は、「ラディミチ」の元代表のパーベルさんの教え子。チェルノブイリに関する展示会を地域で開催したりしていて、展示物を「ラディミチ」のカーチャさんの「情報センター」から借りたりするとうことで協力関係があるそうです。「リクビ

ダートル」の話を聞いて、とても心をうたれ、チェルノブイリの問題の解決のために自分達も何かしたいと思った」とのこと。「リクビダートル」を「被害者」ではなく、「英雄」としてのみとらえていることはどうかと思いましたが、事故後に生まれた若い世代の人々が、事故当時の体験を聞いて継承し、自分達の課題として受け止めようとしていることには感心しました。

他に「環境問題」として、どのような課題に取り組んだりしているのか聞いてみたところ、「公園の清掃」「ゴミの分別収集」（どこかのサナトリウムの近くのゴミ収集所に水銀汚染があったとか）「化学物質による河川の汚染」…という話しでした。放射能汚染との関係で、原発問題や代替エネルギー、あるいは地球温暖化などのグローバルな問題などについても関心があるのでは…と少し期待し、そちらに話を向けてみたのですが、一向にそのような話題は出てこず、どうも地域のゴミや汚染問題、等々にしか、今のところ関心が向いていないようでした。

チェルノブイリ原発事故の碑

ノボジプコフの街に住む元リクビダートルの方々が4月26日朝、チェルノブイリの慰霊碑の前で集まると聞いたので、アントンさんと一緒に出かけてみました。時間を間違えたのか？リクビダートルの姿はありませ



んでしたが…。美しい小川のほとりに、汚染のために廃村になってしまった郊外の村から移された「戦争慰霊碑」（亡くなった兵士を悼む母親の顔の像）と、その手前に「チェルノブイリ事故の祈念碑」がありました。まるで大きめのマンホールの蓋のような形をした石碑上に、放射能マークと「1986年4月26日、突然、平和の核が、大地に死の脅威をもたらした…」との文字が刻まれています。

チェルノブイリの日の「記念行事」

26日の午後には、ノボジプコフ市の主催で、「チェルノブイリ事故の記念行事」が市の文化会館で開催されました。（「毎年やっている公式行事で、あまりおもしろくもないので、ちょっと様子を見て、途中で抜けたらいいよ。」と、アントンさん。）文化会館に入ると、入り口近くのホールには、チェルノブイリ事故をテーマにした子供たちの絵が展示されていました。内容は、市長挨拶、踊りや歌、そして亡くなったリクビダートルの妻のお話、そしてまた踊り…。（話しの内容は、全部はわからなかったのですが…）行事全体として、事故で亡くなったリクビダートルを「英雄」として悼む、被曝した彼らの働きを讃える、ということが



強調されていたように感じました。事故処理にあたったリクビダートルはもちろんのこと、ここノボジプコフに住んでいる人々皆がチェルノブイリ事故の被害者なのに…と思いました。

500人以上は入れそうな会場は、ほぼ満席でしたが、住民が自主的に参加しているというより、どうも地域の組織や学校などから「動員」参加という感じでした。

残念！今年の「反核フェス」は雨で中止

10月は週末になると雨・雨・雨！2度に渡る台風で被害も甚大。あおりを食らって長居公園で行われる予定の今年33年を迎える「戦争はいやや！核なんかいらん！反核フェスティバル」もやむなく中止に！山科代表も元気に挨拶をと張り切り、チラシ・パネルや手作りケーキ等準備万端整えたのに…。何よりもダンスコアポシブルによる創作バレエ「折り鶴」を皆さんに観ていただけなかったことが残念！折角、新しいアイデアも盛り込み力を入れて準備していただいていたのに。（でもこの創作バレエは12月17日の「救援関西発足26周年のつどい（表記）」で披露していただけることに。是非ご参加ください。）

来年は秋晴れの下「青い空気」を満喫しながら元気に「反核フェス」が開催されますように。

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプを続けてきて



ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ(以下ゴーワク)も7年目9回目のキャンプを無事に終えることが出来ました。

今年のキャンプでは以前参加者だったこどもたちが、手伝ってくれる人(ゴーワクではボランティアの人をこう呼んでます)として何人か関わってくれました。

これは、ゴーワクをやり始めた頃、何年続けられるかも分からないのに、こうなればいいなあと想像(妄想?)していたことの1つだったので本当に嬉しいことです。

保養キャンプという成果の見えにくい活動の中で、こうしたつながりを築けたことが、ゴーワクを続けてきた確かな成果と言えるのかもしれません。

保養を巡る状況は厳しいと言わざるを得ませんが、ゴーワクはつながりを大切にしながら、出来る限り続けていけるよう頑張っていきます。暖かい支援をこれからもよろしくお願いします。

文責 ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ
ばっしー



2017 年夏、ゴーゴーワクワクワクキャンプ、メデイカルチェック報告

3. 11 からはや6年。今夏も京都南丹の古民家で、おいしいご飯とのんびりゆったりの、ゴーゴーワクワクワクキャンプが開催されていました。

東日本大震災に伴う、福島第一原発事故による放射能汚染によって、汚染された地域に住む子どもたちを一時的にでも放射能から遠ざけたい、保養をしてもらいたいという学生さん達の思いから始まり、毎年、子どもたちと親御さんを京都に招き、40日間の長丁場、ユニークなキャンプが開催され続けています。

「救援関西」の振津(医師)と猪又・長沢(看護師)で、8月4日と20日の2回、メデイカルチェックに伺いました。キャンプ参加中の子ども達の健康チェックですが、初めての子、毎年お会いしている子、いろいろです。「行かせたかったが行けなかった」6年たって初めて参加の方もあり、今だからのニーズもあることを教えられました。

今年は最初のキャンプの参加者(かわいい小学生だった)が高校生になり、子どもの見守り手伝いに参加されており、ビックリしました。2011年の写真を出してきて「キャー、いるいる！」とスタッフ共々盛り上がっていました。

2011年は、参加している子ども達と笑いながらも緊張がつたわることがあり、調理を手伝ってくれているお母さんが、世間話をしながら突然泣き出してしまう場面もありました。あの時のキャンプを立ち上げた若い人たちの衝撃と強い思い、行動力を思い出しつつ、6年の月日をちょっと考えてしまう夏でした。

ゆみ

10. 26「反原子力の日」に関電に申し入れをしました

10月26日、若狭ネットの呼びかけに応じて「救援関西」も立団体と一緒に関西電力への申し入れ行動に参加しました。6年半以上たってもフクシマ事故がまだ続く中で、あくまで原発を維持しようとしている関電に「チェルノブイリ・フクシマ」を教訓に原発を即刻止め、再生可能エネルギーに転換するように申し入れました。

10. 26 「反原子力デー」に際しての関西電力への申し入れ

関西電力株式会社社長 岩根 茂樹 様

チェルノブイリ原発重大事故から31年が経ちました。事故被災地では今でも被ばくを少しでも低減し、住民の健康を守るための努力が続けられています。そして子供たち、その次の世代へとその努力を受け継いでいくための教育にも取り組まれています。広大な大地や自然はいったん放射能汚染されてしまえば、その影響は長期にわたらざるを得ません。

東京電力福島第一原発重大事故から6年7か月が経ちました。政府は、今年3月末で20mSv/年基準で、帰還困難区域を除いて避難指示を解除し、自主避難者に対する住宅支援の打ち切り、避難者への2018年3月末の精神的賠償の打ち切りなど、次々と支援を打ち切り被害者の切り捨てを強めています。福島県だけでも、未だに5万5千人もの人々が不自由な避難生活を強いられています。避難者は事故がいまだに収束せず、汚染の残る中で、帰還か移住か等重く苦しい選択を迫られています。人格権など基本的人権が著しく侵害されています。また、廃炉・汚染水対策の為に毎日6千人もの労働者が大量の被ばくをしながら作業に従事していますが、未だに事故収束・廃炉に向けた道筋すら見えていません。

原発はひとたび重大事故を起こすとり返しがつかないことは、チェルノブイリやフクシマの被害を見れば明らかです。

さらに原発は事故を起こさなくても、使用済み核燃料も溜まりつづけます。将来への重大なつけである、この核のゴミを処分できる場所などどこにもないことは明らかです。

コントロールのできない核を使用し、経済的にも成り立たない原発にいつまでも執着し、再稼働に血道をあげる理由はありません。国民の過半数は再稼働に反対しています。原発を再稼働させるのではなく、全ての原発を動かさず廃炉にし、再生可能エネルギーへ抜本的に転換することを今すぐに決断してください。

以下申し入れます。

- ・高浜3・4号機の運転を即刻中止し、大飯3・4号機の再稼働を断念してください。
- ・運転40年を超えた高浜1・2号機と美浜3号機を即刻廃炉にしてください。

大飯1・2号機の40年超の運転を即刻断念し、直ちに廃炉にしてください。

- ・使用済み核燃料中間貯蔵施設の立地計画を撤回し、プルスーマル等再処理・プルトニウム利用計画から撤退してください。これ以上行き場のない核のゴミを生み出さないでください。
- ・チェルノブイリ・フクシマを教訓として、貴社のすべての原発を動かさず廃炉にしてください。再生可能エネルギーに抜本的に転換し、その普及・拡大に協力してください。

チェルノブリ・ヒバクシャ救援関西

♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣お知らせ♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣♡♠♦♣

* エネルギー基本計画を脱原発・脱石炭・再エネ大幅導入で！
政府交渉に向けて市民の意見をまとめる関西討論集会

日時：12月8日（金）午後2時～5時

場所：高槻市民交流センター 5F／視聴覚教室

呼びかけ：地球救出アクション（連絡先：090 - 7090 - 1857 稲岡）

* 「救援関西」発足 26 周年のつどい（表記）

日時：12月17日（日）午後1時半～5時

場所：エルおおさか南館 734 号室



カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

(2017.9.4～2017.11.19)

(今回は 10 月 1 日に行われた「自主上映とお話のつどい」への賛同カンパをいただいた方も一緒に掲載させていただきました。

原発の危険性を考える宝塚の会 小林幸子 小谷美智子 吉崎恵美子 大野ひろ子 前原英文
金子龍太郎 藤田達 花岡光義 大田美智子 奥平純子 井上和歌 赤部三千代 池島芙紀子
尾崎一彦 遠藤慎夫 稲岡美奈子 井上保子 小野洋 稲岡宏蔵 宇野田陽子 猪又雅子 木村
英子 黒河内繁美 加堂妙子 笠原英夫 喜多康夫 木下佳子 小林美香 小谷ちず子 川岡明
恵 久保良夫 久保きよ子 小林まゆみ 定森和枝 田原良二 高橋典子 高橋もと子 竹本菊
郎 田中章子 鎮西節子 寺西清 中沢浩二 長沢智行 長沢みちる 中川慶子 根本がん
長沢啓行 中西克至 長沢由美 原三郎 堀本フミ子 東野セツ 堀田みえ子 振津かつみ
森妙子 村上玲子 三田宣充 三田恭子 前田由隆 松野尾かおる 山崎隆敏 山下晴美 山崎
清 山田耕作 山本次子 山本英子 横山清美 染木富美代 他多数

(順不同・敬称略)

ニュース発行:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

連絡先:〒591-8021 堺市北区新金岡町 1-3-15-102 猪又方

Tel : 072-253-4644

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

郵便振替:00910-2-32752

口座名:チェルノブイリ・ヒバクシャ救援